

1. はじめに

平成24年度前期の授業評価にあたって、従来と同様に、当該年度のアンケート結果とともに既存のデータとの比較検討を行った。図1は平成19年度～24年度の前期における「最頻回答の推移」*1を、また表1は「最頻回答の内容と比率」を示したものである。アンケートの選択肢は①～⑤及び⑥であるが、図2、図3にそれぞれ「④⑤あるいは⑤⑥の比率」「①②の比率」の経年変化を示した。また図4には前期・後期を通じた過去の「④⑤あるいは⑤⑥の回答比率」の経年変化を示してみた。

全体にわたって肯定的評価が高い。ただし「授業への関心」「真剣な態度」「予習・復習」の項目で最頻回答が③（どちらかというと思わない）であり、従来同様にやや否定的評価となっている。「真剣な態度」については、前年同期の最頻回答④（どちらかというと思う）に対して、今年度は③になっており従来の最頻回答に戻った。また「教員の熱意」「目標の達成」「得たもの」「満足度」の項目は最頻回答が④（どちらかというと思う）であり肯定的評価となる。一方で、経年的に見てみると、緩やかではあるが<いずれの項目>においても肯定的評価が高まっている傾向が見られる（表1）。

「授業の量」「授業の速度」「授業の難易度」においては適切と判断される③が最も多く、単純に受けとめれば、適切な授業の量、速度、難易度で授業が行われていると読み取れる。加えてその割合が高まってきていることが分かる（表1）。最頻回答③（適切）は、「授業の量」が65.7%（平成19年度前期）→76.2%（平成24年度前期）、「授業の速度」が70.5%（同）→79.8%（同）、「授業の難易度」が50.6%（同）→64.3%（同）である。授業の量、速度、難易度について学生から見た評価は、より適切なものになってきていると読み取れる。

これらを総合すると、年度を追う毎に授業に対する学生の関心、態度、予習・復習が向上し、また授業運営に対する教員の努力も反映して、より適切な授業運営に向かっており、そのことが目標の達成、得たもの、満足度の高まりとなって現れてきている、といった好循環の形に緩やかに向かっているとも言える。

一方で全学的にみると本学部授業に対する評価の位置づけは高いとは言えないようだ。今回は提供されたデータに不備があったため全学的な比較検討を十分には行えなかったが、これまでと同様の傾向にあるようだ。この点は従来から指摘される総合政策学部独自の特徴でもありそうで、今後の授業方針・構成として検討課題でもあろう。

以下、各項目についてみていく。

2. 各項目の分析

「授業への関心」について大きな変化はないが、強い否定評価である①②はアンケート

調査が始まって以来の最も低い値を示しておりよい傾向と言える。

「真剣な態度」「予習・復習」においては、強い肯定的評価(⑤⑥)の合計値が過去最高値となっており、一方で強い否定的評価(①②)は逆に過去最低あるいはそれに近い値を示し、良い傾向である。

「履修時期・学年」「履修数」については最頻回答が③(中位)であり適切と判断される。「授業の量」「授業の速度」「授業の難易度」についても上述したように、適切とされる評価(③)の値が年々高くなっており今年度最高値を示しており良い評価と言えよう。

「教員の熱意」については最頻回答が④と一定の評価を維持している。また⑤⑥(強い肯定的評価)が47.6%と高い。

「目標の達成」「得たもの」「満足度」については、強い肯定的評価(⑤⑥)が過去最高値もしくはそれに近い値となっており良い傾向にある。

全体を通じて大きな問題は見られず、いずれも一定の肯定的な評価を得ている。特に経年的な変化を見るといずれの項目においても緩やかな向上傾向が読み取れる。ここには、授業に対する<学生の関心・態度の向上>と<教員の授業改善努力>の相互作用から、より<適切な授業運営>に向かっており、そのことが<得たもの、満足度>の向上として現れているといった好循環が形成されてきているようにも見られる。

これらのことは非常に喜ばしいことであるが、あくまで緩やかな傾向であり今後を見守る必要がある。また直接授業を通じた実感としてこうした好評価が獲得されているものではなく、さらなる授業改善の努力は求められよう。

3. おわりに

これまでどちらかというと厳しい評価結果の面もあったが、今回は上記のように喜ばしい結果となっている。従来から後期に比べて前期が悪い評価傾向にあったが、今回は後期と同様な好ましい評価が示されている。ただし、こうした好循環の傾向が持続したものであるか否かは不明である。今回の好評価の要因について、単位制限の効果、学生・教員のモチベーションの向上、等、委員会で検討してみたが明らかな要因は見いだせなかった。また、今回の主回答者となった学年の状況、あるいは一時的な現象、などかも知れない。

また全体としては好評価にあるものの、「目標の達成」「得たもの」「満足度」について、どちらかというとな否定的(③)も加えると否定的評価が約3割ある。この割合を多いと見るか、許容範囲と見るかは見解が分かれるのかも知れないが、さらに多くの学生からの好評価に向かうよう改善努力する必要がある。これらの課題は授業運営に対する教員の原動力として吸収するべきであろう。

いずれにせよ、総合政策学部としての意義と特徴を活かして、さらに充実した授業へ取り組み組んでいきたい。

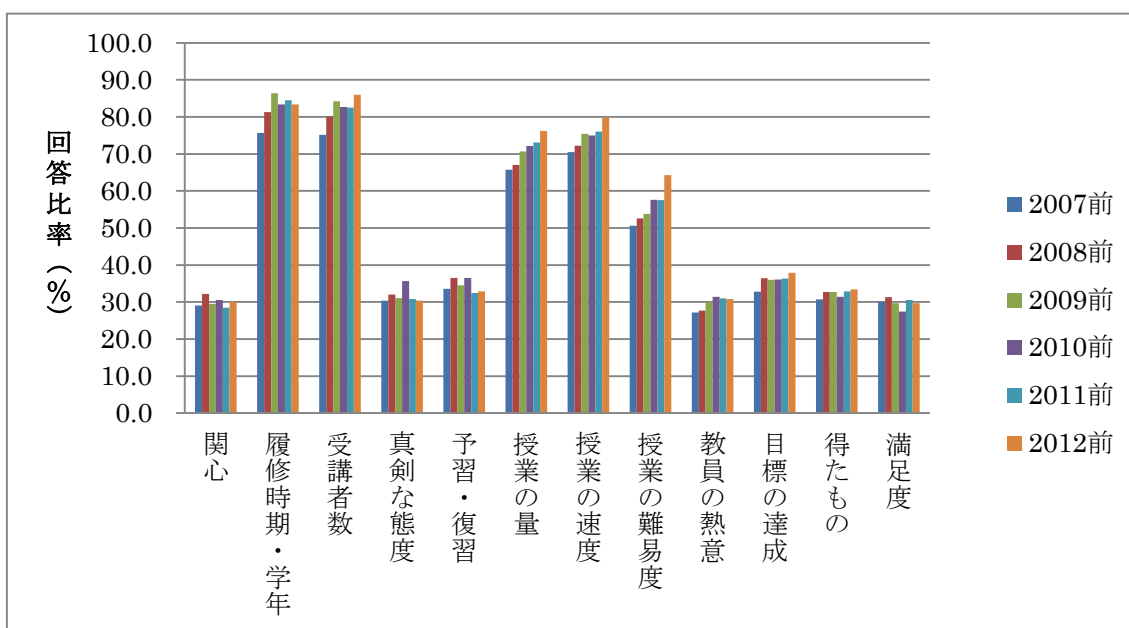


図1 2007年度以降の前期における最頻回答比率の経年変化

表1 2007年度以降の前期の最頻回答の内容と比率

項目1,4,5,10は6段階評価、その他の項目は5段階評価

No.	項目名	最頻回答						比率					
		2007前	2008前	2009前	2010前	2011前	2012前	2007前	2008前	2009前	2010前	2011前	2012前
1	関心	3	3	3	3	3	3	29.1	32.2	29.5	30.5	28.5	30.0
2	履修時期・学年	3	3	3	3	3	3	75.7	81.3	86.4	83.4	84.5	83.4
3	受講者数	3	3	3	3	3	3	75.2	80.1	84.2	82.7	82.5	86.0
4	真剣な態度	3	3	3	3	4	3	30.4	32.0	31.1	35.6	30.8	30.4
5	予習・復習	3	3	3	3	3	3	33.6	36.5	34.5	36.5	32.4	32.9
6	授業の量	3	3	3	3	3	3	65.7	67.0	70.7	72.1	73.1	76.2
7	授業の速度	3	3	3	3	3	3	70.5	72.2	75.4	75.0	76.0	79.8
8	授業の難易度	3	3	3	3	3	3	50.6	52.6	53.8	57.6	57.5	64.3
10	教員の熱意	4	4	5	4	4	4	27.2	27.7	29.9	31.4	31.0	30.8
11	目標の達成	3	4	4	4	4	4	32.8	36.4	36.0	36.1	36.3	37.9
12	得たもの	4	4	4	4	4	4	30.7	32.7	32.7	31.4	32.9	33.4
13	満足度	4	4	4	4	4	4	30.0	31.3	29.7	27.4	30.5	29.7

* 1本調査のような選択肢を用いた回答の分析にあたって、統計学においては「最頻回答」(最も回答数の多い選択肢)に注目することで全体の傾向を分析するのが有効とされる。

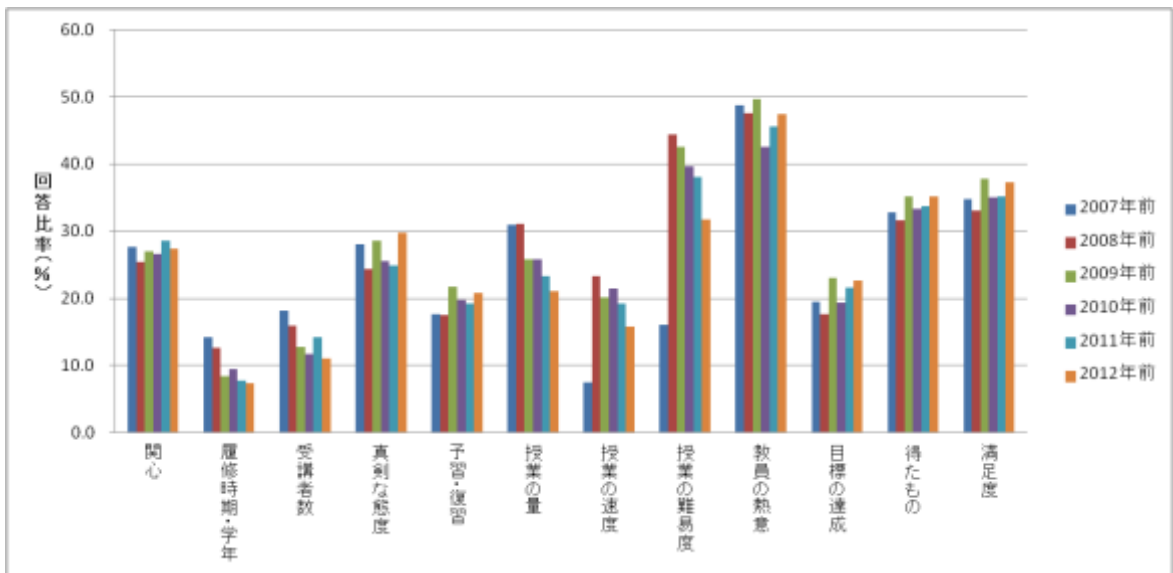


図2 2007年度以降の前期における④・⑤あるいは⑤・⑥の回答比率の経年変化

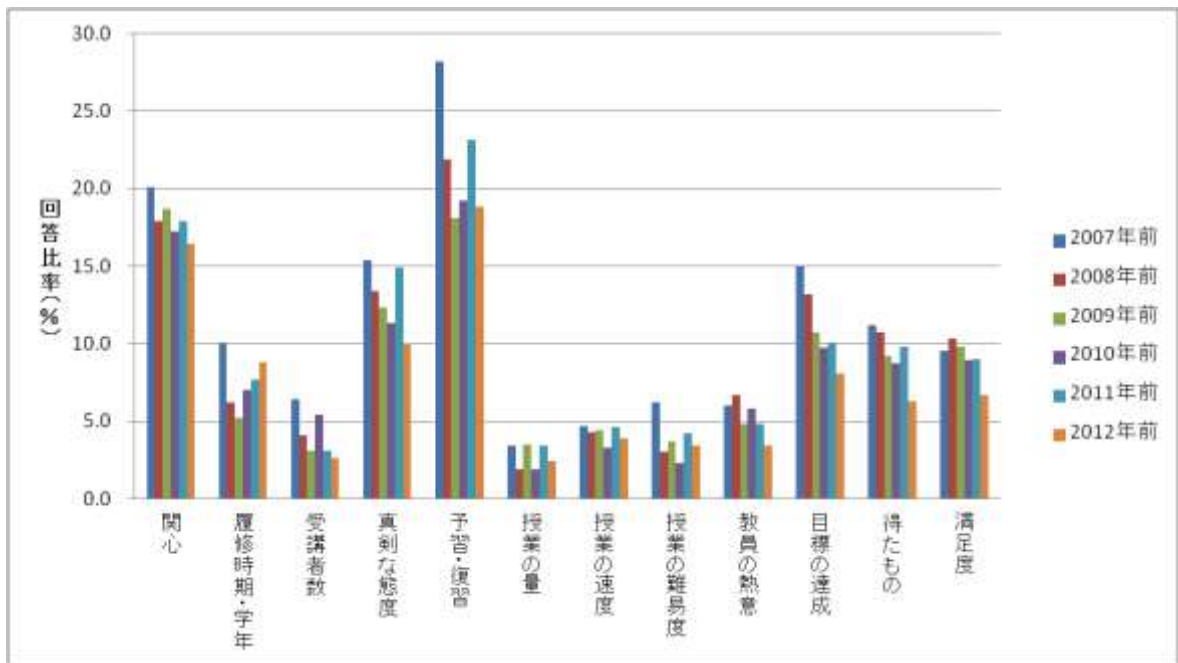


図3 2007年度以降の前期における①・②の回答比率の経年変化

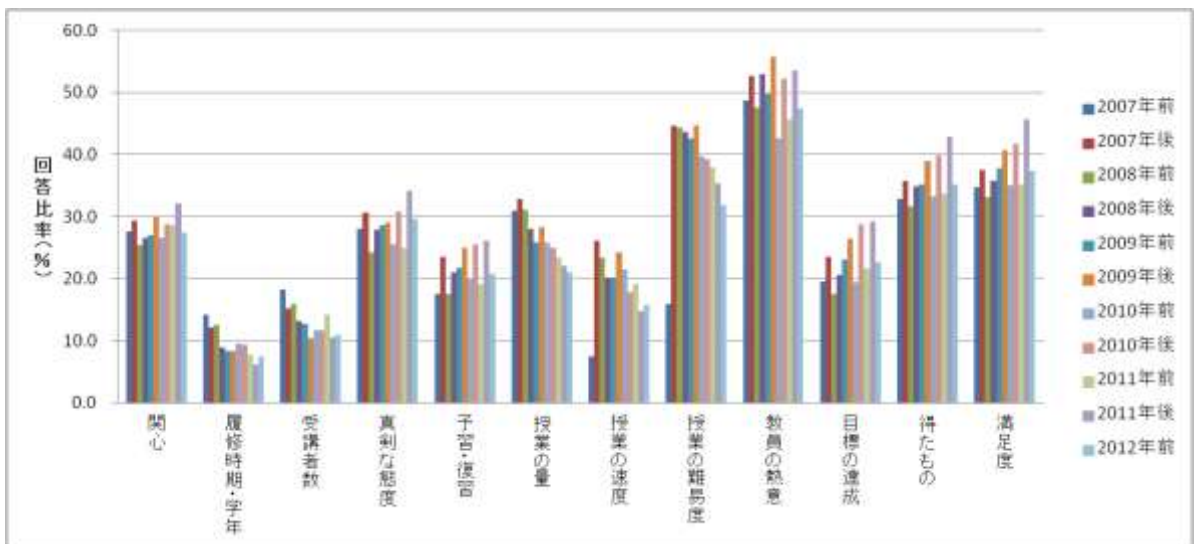


図4 2007年度以降の④・⑤あるいは⑤・⑥の回答比率の経年変化